

編集後記

外岡豊（「人新世生存」研究会 世話人）

宇宙広しといえども地球のような星は見つかっていない。宇宙の唯一のオアシスのような星で最上位の生物として君臨する人類に生まれて、こんな恵まれた存在は他にない。しかし、紛争地域や難民として暮らしている人が億単位で存在するという事は人類の百人に一人以上は困難な生活を強いられているということである。そうした中で温暖な気候と風光明媚な列島に日本人として生まれ育った人は極上の恵まれた存在である、であった筈であったが、これからの世界と日本はどうなっていくのであろうか。地球環境の破壊と異常気象が顕在化する中で、人類社会は混沌に向かい、日本社会はその良さを活かさない閉塞化のうちに少子化が進み、人口も活力も縮んで行く『自縮社会』へと向かっている。過ごしやすかった春も秋も短くなり、猛暑の夏が長くなり、線状降水帯の豪雨被害が頻発、重ねて大地震発生や火山爆発の確立も増大しており、のうのうと暮らしてゆける時代は終わろうとしている。

気候危機、人新世、生物大絶滅という人類史上、地球史上未曾有の事態に直面しているということが世界的に共有されているのに、日本では危機感が共有されていない。そうした中、人新世生存研究会は2023年3月に発足した。きっかけは、星野克美著「人新世の絶滅学」副題「人類・文明絶滅の思弁的空無実在論」が2022年11月に刊行されたことと、同月に開催された地球システム・倫理学会大会において星野克美と西原智昭と外岡が同室発表したことであった。3題はともに地球環境の極めて深刻な状況を浮き彫りにするもので、議論がかみ合い、司会者の山脇直司（同学会副会長・当時）はさながら企画されたシンポジウムのものであったと評した。この大会は、共通主題「人類はどこへ向かうのか？真のwell-beingを求めて」として慶応大学三田で開かれ、午後のシンポジウム「well-beingを求めて」が楽観的な話題であったことと、午前中の三者の発表の地球環境問題の深刻さの落差が際立っていたことも山脇直司は同年報に大会報告として書いていた。学会の一般発表の席上では異例のことながら、星野が82才（学会当時）と高齢であることから、自分は学会発表から引退したいが、若い世代に地球環境の危機を伝えたいので研究を引き継いでくれないかと突然、西原、外岡に要請があり、地球環境問題の深刻さ、その重要性に鑑み、この研究会を立ち上げることになった。星野氏の力作、520頁の著書を広く多くの人に読んでもらい、地球環境の危機認識を広げようと、まず星野氏が長大な自著を説明する研究会を開催することから、この研究会は始まった。

研究会を進めるうちに、絶滅学とはどのような学問なのか、わかりにくいとか、絶滅を回避しようとする実践指向の学であるべき、といった討論になり、地球システム・倫理学会で「統合学」を提唱していた秋山知宏も関与していたので人新世統合学研究会と改称された時期もあったが、その後、人新世生存研究会に改称され今日に至っている。

星野著は現在の地球環境の動向は気候危機、人新世、生物大絶滅へ突き進んでおり、ここままで行くと地球CO2濃度が800ppm以上になり、6度目の生物大絶滅が人類活動が原因で起こり得る、それは不可避である、という警告（前半）と、過去の思想史を振り返りこの危機に対処する方策に向けて

の構想を探る新しい哲学を打ち立てよう（後半）というものである。星野氏は研究会に際して毎回、気候危機の最新情報を精力的に集めて来て、その深刻さを訴える渾身のパワポを用意した。

そこで示された科学的に予測される地球環境の近未来はあまりにも深刻なものであり、それを回避できる展望を持つような何かを簡単に提示できるものではない。研究会を続けながら思い至ったことは、絶望をどう希望に変えるか、であった。研究会の討論を何とかして希望につなげたかったが、そう簡単な話ではない。そこで出会ったのは鈴木忠志の言葉であった。早稲田小劇場と富山県利賀村で独自の演劇活動を続けて来た鈴木忠志が日経新聞の連載記事「私の履歴書」で、どうやって困難を乗り越えるのか、それは絶望の中から希望を見出すことだというようなことを書いていた。それは彼の経験として、個人としても社会としても同じようなことだと書いてあったように記憶している。現在、気候危機があり、これから長く、人新世の困難があり、人類全体が絶望せざるを得ない深刻な事態が近未来に厳然として立ちほだかっている。これを正面から受け止めて日常生活を維持し続けて行く他ない。

地球環境危機の厳しさは、それを多くの人と共有する上で、大きな障害になっている。一般の市民向けにいきなり話しても的確な理解を得ることが難しいだけでなく、専門家の間でも危機感の受け止めに差があり、懐疑論等もあり、危機感を共有できるとは限らない。この研究会内部でも意外なことに一番の論客2名が異説を称える論考を出している。一般論としては、「まずは疑ってみよ」は推奨される対応ではある。

こちらは、昨今の世界的な異常気象等を見れば地球環境の危機は客観的な事実として受け止めるを得ないように見ており、早急な対応を取らないとさらに事態が悪化することを懸念しており、そのような認識において、異説を受け入れがたく考えているところである。仮に謙虚な態度で、幅広く異説を再考しようとしてみても気候危機の深刻さの認識は変わりそうにない。討論の場を仕切る立場としては、気候危機への異論は歓迎したくないものであるが、十分な討論ができないまま刊行に至っている。今後の研究会で多くの研究者の言説を聞いて、その上で認識を改めていただけることを願っている。

多少の異説はあっても、幸い、この研究会内部では最新の学術情報に基づいて自由活発な討論が行われていて、忌憚なく意見交換ができていて、昨今の学会、論壇、報道等では的確な知識や状況理解から外れた、不正確な認識が共有されたり、意図的に間違った情報を流布する勢力や、社会的に共有すべき知識を有料化して困り込む勢力等、望ましからざる事態に直面することも多々あり、閉塞感を感じるが増えている。研究会、学会、その他の活動を通じて、地球環境の危機に立ち向かうべく、世界的な共通課題ではあるが、まずは日本国内での対応策の拡充、推進に向けて微力を尽くして行く所存である。

富樫豊（「災害と社会」研究談話会 世話人）

本冊子（論文報告集）が執筆者各位の論文でまともだと、本冊子にちりばめられた幾つもの光る特徴や苦勞が編集側としては感無量の喜びとなっている。だからこそ編集者としては、皆さんとともに想いを共有したく、ここに本会（研究談

話会)の活動における特徴や苦勞を「あとがき」として紹介することにより、自由闊達な研究の社会的位置づけを再確認いただければと思う次第である。

(1) 力作の編集に携わって；本冊子の作成には、かつての日本建築学会特別研究委員会時代の報告書作成と同じ感覚で臨むこととなった。その感覚とは、委員会時代に提案したテーマ「防災・社会の健全化」のもと、社会そのものを研究対象にすることには何の違和感もなく、却って社会全体の問題を俯瞰・深堀として諸問題に対処しかつ学術体系を各分野に跨って構成しようという機運が高まったことである。こうして、皆さんの研究活動を「思考・セス」と共に本会が社会に向け発信する次第である。

(2) 本会の目指すところ；本会はあえていえば、研究コミュニケーションの場であり、(研究)対象を社会全体に設定することも自由闊達な自然の理と位置付けており、また対象の広範囲性を本会の名称「災害と社会」にも反映させた。よって、本冊子の題目は工学や環境学からみた社会の在り方論、というべきものであり、方向性については社会の捉え方考究とか、諸問題の社会的背後へのアプローチといったものとなる。

(3) 語り合いの場；研究談話会では、月1回の例会において当番のプレゼンが3時間の持ち時間で話題を持ち込み、前半はプレゼン、後半はQ&A(語り合い)である。特に語り合いでは、全員が参加し、かつ時間をかけるとあって、会場は研究観や世界観などが反映された哲学的様相となり、コミュニケーションに華が咲くのである。しかしながらそうした語り合いは初めからすんなりと受け入れられた訳ではなく苦勞もあった。以下に記す。

a. Q&Aをもっと効率よく使いたいとの提案があった。確かに討論の時間が限られている場合には効率よくQ&Aが必要である。本会は研究コミュニティであるゆえにコミュニケーションでは効率を必要とはしていないのである。むしろ、問題の全貌を認識できるようにかつ研究人の姿勢(哲学)を磨くとともに語り合いを楽しみましょうと答えた。

・「議論ばかりして何になるのか」との問いかけには、語り合いを一度体験してみましょうと答えたこともある。

・「議論がいつも発散してるが」の指摘には、発散は爆発であり、よりダイナミックに俯瞰・深堀が可能。また「ゆらぎ」も大いに結構。これらがあるからこそ種々の系統が繋がりに関連するのであると返答した。

(4) 本会結集の各位の気質(思考の奥深さ、卓越したセス)多くの語り合いの中でいつも思うのは、皆さんの(思考や感性の)奥深さ。度量の大きさ、着眼点の鋭さ・多様さ、卓越したセス、自ら創り上げるパフォーマー。こうした素養を持ち、思考行動できる人間って素晴らしい。その一言に尽きる。研究の楽しみは人間的な喜びということもいわれ始めているが、それはまさに本会の語り合いから始まるというみたい(研究も健全な人間性にありつてことのように)。

(5) 今回の特徴ある企画；本冊子では他にあまり見られない特徴として、二点あえて試みた。そのうちの 하나가、岡田先生の想いを開花させた討論論文の掲載である。ここでは6課題92ページにも及ぶ討論における語り合いを紙面上で再現し、さながらコミュニティの場を形成させた。執筆者各位が口から泡を飛ばしての様相や声がさながら聞こえてくるかのようである。

今一つは、いくつかの例会の実講演をyou-cubeに格納

して、皆様に見えるようにした。理由は、弁士のエネルギーな所もぜひ知っていただきたいからである。もちろん語り合いの風景が視聴できることになっている。

(6) 多岐多様な方々の研究のとりまとめ；「多岐多様な個性的な方々の研究をどうやってひとくくりにして纏めるのですか」と聞かれたことがある。「だから俯瞰と深堀なんです。巷の言葉ではデコイです。」と答えた。これについても、問題の背後にある姿勢が大きく関与し、タフウォース型ではなかなか多岐多様を束ねることは難しい。また、連携や複合・融合としても難しいとみている。なぜか。それは一般には、設定領域が狭いからである。本会で工学系を扱うにしても問題を広くとらえている。例えば、「文理融合ではなく文理は元から一緒のもの」とか、「防災工学を例にしても工学からの社会に関わる体系は工学体系を超えて社会学体系である」とか、「諸問題の根っこはすべて共通」とか、「社会的基礎土壌が基本にある」といった論が本会に結集の皆さんはいうに及ばず、本会そのものにもあるので、本冊子も当然ながら、そうしたフッワーが根底に備わっているといえる。

(7) 以上、本冊子では、工学視点にてこの指止まれるの感覚でもって多岐多様な分野や事象を結集させて、本会のパッションに感じ入っていただいた多くの方々から自由論文を作成し、冊子の中身を賑やかに飾った。そんな冊子であるので、読者は是非語り合いのモードで紙面を通してコミュニケーションに加わり楽しんでいただければと思う次第である。

以上をもって、本冊子(論文報告集)に込められたエネルギーとパッションの紹介とし、今後にもむけ本研究が世の中において大きな潮流形成のポモロガーに資すると確信している。なお、我らにとっては、本冊子が世に出たことは望外の喜びである。これも、ひとえに執筆者各位、UEDの阿部氏の尽力の賜物であり、ここに、喜びを共有するとともに、記して謝意を表する次第である。

阿部和彦(一財・日本開発構想研究所 代表理事)

私が傍聴させてもらった「人新世生存研究会」における星野克美氏の「人類大絶滅」の言説は衝撃的であり、またそれを巡る参加者の議論もそれぞれの専門を踏まえて多岐に渡って興味深かった。その中で、最も衝撃的であったのは、「人類絶滅時期」の想定仮設で、ケース1では、2080年に、大気温度が4℃上昇し、5回目の大絶滅が起こった約6500万年前のK-T境界に相当する環境になり、原生人類が大絶滅するというものであった。

熊澤氏は、CO2濃度800ppmで大気温度が4℃上昇するという仮説は科学的に論証されていないし、短絡的だと反論し、岡田氏は星野氏の言説は希望のないニヒリズムではないかと指摘した。

私も、こんなに近い時期に人類が大絶滅してしまうのであれば、脱炭素に向けた努力は無意味に思われ、生き延びるための方策を考えたい。ただ、社会科学を学んできた人間としては、人類の大絶滅に至る過程で生ずる、米国第1主義による世界経済の分断とその行くすえ、開発途上国に偏在する地球温暖化の被害、旱魃等による食料生産の減少と生産適地の変動、紛争や戦争の頻発による人命や資源の浪費といった事態が、人類の大絶滅にどのように関わっていくかについて、考察を深めていきたいと思う。